台大日本語文研究第 10 期
2005 年 12 月，頁 27～52

日語中的目的構句

薛芸如 *

摘要

本文就日語的目的構句「～に行く」加以探討，特別是助詞「に」的句法功能再次檢驗。文中就宮川繁(1987)所提之主張，即目的構句基於主要動詞與動詞組中的動詞是否有鄰接關係來決定可否重新建構加以探討，發現由附加語條件可以合理解釋宮川所謂重新建構非義務操作之見解實乃取決於目的詞組位於補足語或附加語的位置。而目的構句的形成則是功能範疇「に」與主動詞「行く」的嚴密次類畫分所決定。有別於以名詞組爲補語的助詞「に」，本文提出「に」在目的構句中的功能爲輕名詞。

關鍵詞:目的構句、重新建構、附加語條件、功能性主要語、輕名詞

* 元智大學應用外語系講師

臺灣大學學術期刊資料庫

Purposive Structure in Japanese

HSUEH yun-ju *

Abstract

This paper is concerned with the Purposive structure in Japanese, which is comprised of 'VP-ni iku'(go for…), especially with the function of particle 'ni'. After reviewing Miyagawa's (1987) analysis, I argue that the structure 'VP-ni iku' is a matter of functional head; i.e., light noun ni's selection rather than restructuring with the support of Adjunct Condition. Unlike conventional usage of 'ni' ,which assigns case to NP, the one in purposive structure takes VP complement. With respect to extractability, it is argued under Adjunct Condition that the NP under the embedded VP can be extracted if the VP is at the complement position of matrix verb 'iku' .

Key words: purposive structure, restructuring, Adjunct Condition, functional head, light noun

* Lecturer at Department of Foreign Languages and Applied Linguistics, Yuan Ze University

臺灣大學學術期刊資料庫

目的構文「～に行く」について

薛芸如 *

要旨

本稿は日本語の目的構文「～に行く」について論ずるものであり、特に助詞「に」の機能に着目した。宮川(1987)の考えを検討しながら、私は宮川が考えた再構造化よりも付加詞条件が課された証拠を取り入れ目的構文「～に行く」は機能範疇「に」の選択、さらに「行く」の選択により形成されるものと論じる。なお、目的句の項NPの移出が可能か否かはその目的句が主動詞「行く」の補部にあるかまたは付加詞にあるのに関わると主張したい。

キーワード：目的構文、再構造化、付加詞条件、機能的主要部、軽名詞

*元智大学応用外国語学系講師

臺灣大學學術期刊資料庫

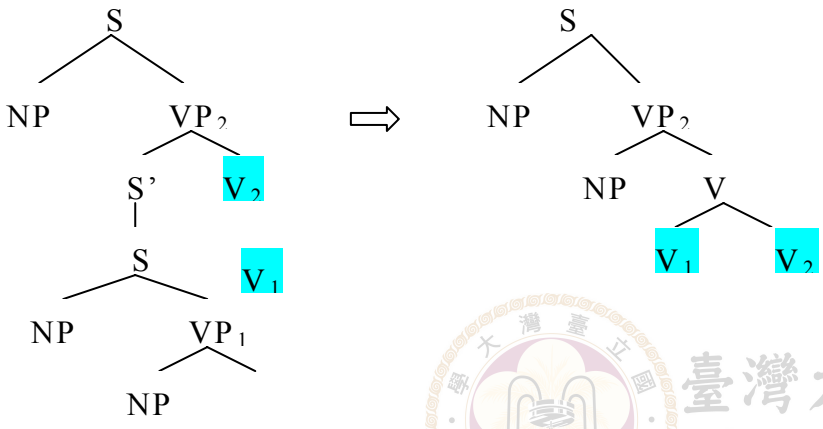
目的構文「~に行く」について *

薛芸如

日本語の目的構文「~に行く」に動詞句(VP)の場合と動作名詞の場合があるが、ここでは一括して目的動詞句(V(N)P)と呼ぶ。主動詞「行く」は着点を補部とし、「に」格あるいは「へ」格を取るが、その他に、補部として目的動詞句「V(N)P に」をとる用法がある。本論ではこの目的動詞句と主動詞「行く」の間の関係について論じる。

目的構文について、宮川(1987)はこの構文が「単文構造」(simplex structure)か「複文構造」(bi-sentential/complex structure)を決定するために、道具格の付加、「しか～ない」の作用域、主動詞の可能形等に基づいてこの構造を調べている。そして宮川は目的構文が動詞の再構造化(restructuring)によって形成されるとしている。この動詞の再構造化は「隣接条件」(string adjacency condition)に従い、さらに再構造化は義務的ではなく、随意的操作であるとしている。宮川の再構造化の操作が次のように行われる。ここでV_1とV_2が付加する操作であることに注目したい。

(1)　　目的構文の再構造化の操作



* 本稿は国科会海外研修助成計画NSC43162Fで行う研究の一部である。

臺灣大學學術期刊資料庫

１．単文構造か複文構造か

宮川は目的構文について隣接関係の有無と再構造化に基づいて和語動詞、漢語動詞の場合を検討している。以下でまず宮川の説明[1]を見ることにしよう。

１．１　和語動詞句

目的構文は目的動詞句と主動詞「行く」[2]によって形成される。そしてこの構文には着点を表す「に」(又は「へ」)格が生じることもある。次の例を見よう。

(2) a 太郎が[PRO 本を買いに]行った]。

b 太郎が神田に(／へ)本を買いに行った。

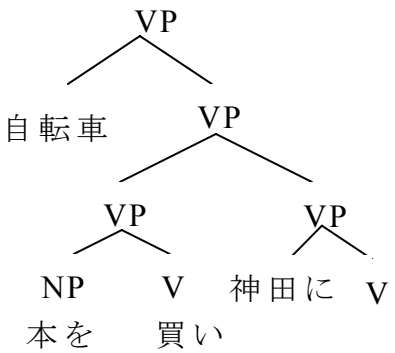
c 太郎が本を買いに神田に(／へ)行った。

d 太郎が自転車で本を買いに神田に(／へ)行った。

e 太郎が神田に本を自転車で買いに行った。

f*太郎が本を自転車で買いに神田に行った。

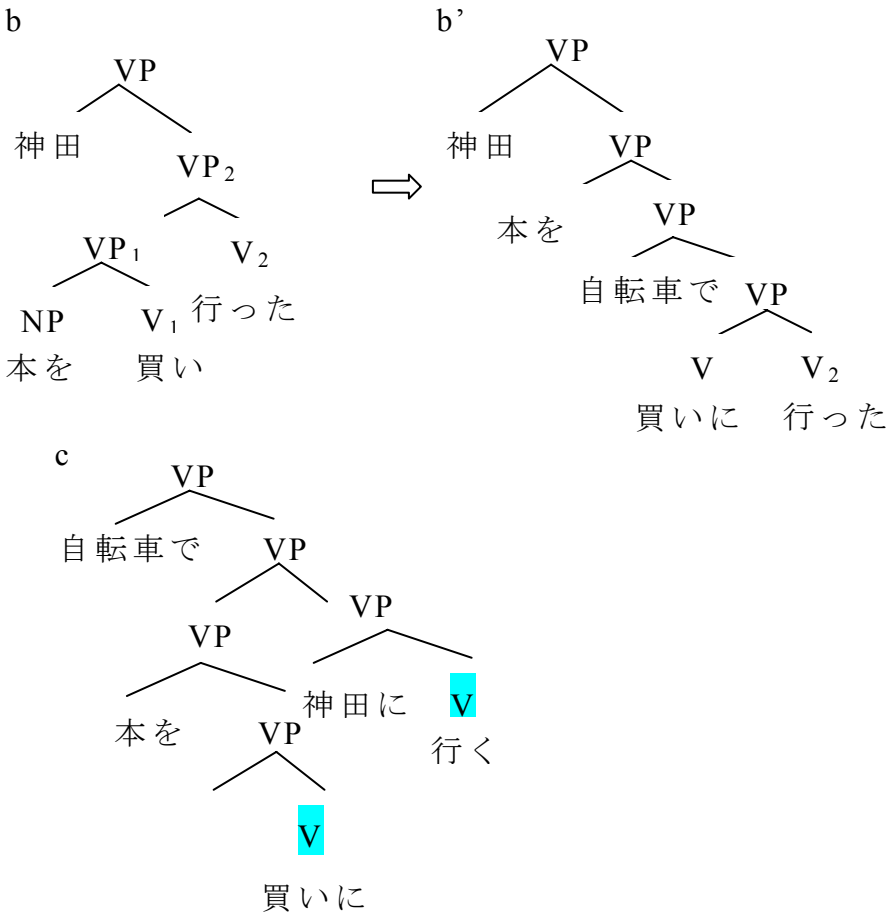
(3) a



[1] 宮川は束縛原理(B)による検証も行ったが、登載する長さの制限により本稿では扱わず別稿に譲る。

[2] 「行く」だけではなく、「来る」も目的構文の主動詞にありうるが、本論では「行く」に基づいて進めていく。

臺灣大學學術期刊資料庫



(2a)の例は目的構文の典型的な構造で、(2b)が着点の「に／へ」を伴う例で、(2c)は着点が主動詞の前に生じる文である。(2d) は(2c)に道具格を付加した文で、その構造は(3a)である。 (2e)は(2b)の文の「本」と「買いに」の間に道具格を付加した例である。宮川はその構造は(3b)から(3b')のように、「買いに」が「行く」に隣接しているので、再構造化が適用され、付加詞「自転車で」は主動詞「行った」を修飾することができる単文構造となるとしている。 (2f)では「本」と「買いに」の間に「自転車で」が付加した例であるが、宮川はこの構造では「買いに」が「行く」の間に「神田に」が介在しているため、隣接関係が成立していない。従って、再構造化が適用されず、付加詞「自転車で」は「行った」を修飾できない複文構造となる。その結果非文となると論じている。

次に、再構造化が働いている証拠として「しか~ない」の作用域について見よう。

臺灣大學學術期刊資料庫

(4) a 花子が図書館に雑誌しか借りに行かない。

b*花子が雑誌しか借りに図書館に行かない。

c [$_S$花子が図書館に[$_{VP}$雑誌しか[$_V$借りに行かない]]]。

d*[$_S$花子が[$_S$PRO[$_{VP}$雑誌しか借りに]]図書館に行かない]。

この構造の違いに基づいて「しか～ない」の作用域が(4a)では「借りに行く」に再構造化が適用された単文構造であり、(4b)では「借りに」と「行く」の間に「図書館に」が介在して隣接関係ができないので再構造化が適用されなく複文構造となっていることが説明されると主張されている。

最後に動詞の可能形-(rar)e-と再構造化について見よう。日本語の動詞が状態動詞の場合、目的語は「が」格をとることから、動詞の可能形「V-(rar)」が一つの状態動詞と見られる。述語が動詞の可能形の場合、同一文中にある目的語が「が」格をとるのが可能となり、「を／が」交替ができる。

(5) a John が英語を話す。

b John が英語{を／が}話せる。

しかし、(6b)、(7b)に埋め込み文の目的語は動詞の可能形とは違う節にあるため、「が」格が付与されなく「を／が」交替の現象が見られない。

(6) a ぼくが太郎にテレビを見るか聞ける。

b*ぼくが太郎にテレビが見るか聞ける。

(7) aぼくが太郎に[$_S$PROテレビを見るか]聞ける。

b*ぼくが太郎に[$_S$PROテレビが見るか]聞ける。

(6)に示したように「テレビを̇」は「テレビが̇」に交替できないのは、(6a)「ぼくが太郎にテレビを見るか聞ける」は(7a)の複文構造だからである。

このことを前提として次の例を見よう。目的構文の可能形でもVP内の目的語の「を／が」交替の現象も見られる。

(8) a 太郎が新宿に映画を／が見に行ける。

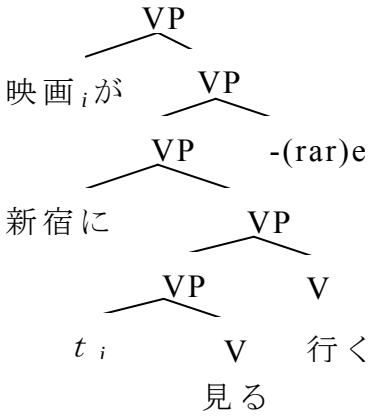
臺灣大學學術期刊資料庫

b 太郎が映画を／*が見に新宿に行ける。

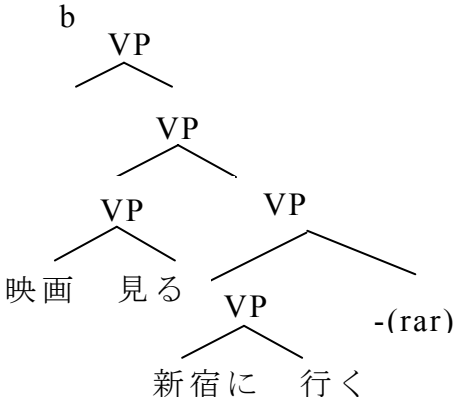
(9) a ぼくが図書館に本を／が返しに行ける。

b ぼくが本を／*が返しに図書館に行ける。

(10) a



b



(8a,b)の相違を宮川は以下のように説明する。「V-(rar)」と「NP を／が」が同一の VP 内にある場合「を／が」交替が可能。(8a)では「映画を／が見に」と「行ける」が再構造化によって単文構造となっていると仮定すると、目的動詞句 VP の目的語が「を」格を取ることが説明できるが、一方「が」格については単文構造であるために(10a)のように「を」格から「が」格の位置への移動が可能であることによって説明される。このようにして、単文である(8a)と(9a)では「を」格又は「が」格は両方とも許される。これに対して、(8b)と(9b)のように目的動詞句の V が「行く」と隣接しない場合には再構造化ができず、目的語は(10b)のようにもとの位置に留まり、「が」格が許されない。

１．２　漢語動作名詞と漢語動詞

宮川は再構造化は和語動詞句「V に行く」だけでなく、漢語の動作名詞「VN に行く」や漢語動詞句「~VN しに行く」にも見られると述べている。次の例を見よう。

(11)a 太郎が昨日先生に自転車で相談に来た。

b*太郎が先生に自転車で相談に昨日来た。

(12)a アメリカに数学を船で勉強に行った。

b*数学を船で勉強にアメリカに行った。

臺灣大學學術期刊資料庫

(11a)と(12a)では動作名詞が主動詞と隣接関係を持つため、再構造化が働き、その結果単文構造の動詞を道具格が修飾することができ、文法的である。(11b)と(12b)では動作名詞と主動詞との間にそれぞれ「昨日」と「アメリカ」が介在し、隣接関係を成り立たない。道具格が主動詞を修飾することができなくなり非文となるという。

次に「しか~ない」の例を見よう。

(13)a アメリカに数学しか勉強に行かなかった。

b*数学しか勉強にアメリカに行かなかった。

「しか～ない」の作用域は同一文中か同一 VP にあるという前提で(13a)では動作名詞が主動詞と隣接関係を持つので単文構造となり、「しか～ない」の作用域が文全体に及び、文法的であるが、(13b)では動作名詞と主動詞との間に「アメリカ」が挟まれると隣接関係が持てなくなり、「しか～ない」の作用域が同一文中でなくなり、非文となる。

更に可能文の「を／が」交替について見よう。

(14)a アメリカに数学を／が勉強に行けた。

b 数学を／*が勉強にアメリカに行けた。

可能形の場合は、(14a)では隣接関係が成立すれば単文構造になるため、動作名詞の目的語は「を」格も「が」格もとることが可能であるが、(14b)では「アメリカ」が介在し動作名詞と主動詞と隣接していないので、複文構造のままであり、目的語は「を」格しか取らないことが説明される。

これまで、隣接関係をもち、主動詞は「行く／来る」と随意的に再構造化する現象を見てきたが、その他に「出かける／帰る／渡米する」など再構造化できない目的構文もある。これらは意味的に複合化した主動詞であるから、「行く／来る」と違って目的動詞句は再構造化が適用できないとしている。

(15)a 太郎が本を買いに出かけた。

b 太郎がタクシーで本を買いに出かけた。

c *太郎が本をタクシーで買いに出かけた。

臺灣大學學術期刊資料庫

(cf. 太郎が本を自転車で買いに行った。)

(16)a 太郎が本だけ買いに出かけた。

b*太郎が本しか買いに出かけなかった。

(cf. ジョンが明日本しか買いに行かない。

(17)a 花子が英語を習いに渡米した。

b 花子が飛行機で英語を習いに渡米した。

c*花子が英語を飛行機で習いに渡米した。

(18)a 花子が英語だけ習いに渡米した。

b*花子が英語しか習いに渡米しなかった。

(cf. アメリカに数学しか勉強に行かなかった。)

(19)a 良子が本を取りに帰った。

b 良子が車で本を取りに帰った。

c*良子が本を車で取りに帰った。

(20)a 良子が本だけ取りに帰った。

b*良子が本しか取りに帰らなかった。

すでに述べたように、目的構文における再構造化は、主動詞が「行く／来る」の場合では随意的であり、主動詞が意味的に複合化した「出かける／帰る／渡米する」の場合では再構造化が適用されないことと述べている。しかし再構造化はなぜ随意的なのか、意味的複合化した主動詞の場合はなぜ再構造化がしないかの問題については何も述べられていない。この問題は次節で論じる。

２．目的構文への再考察

ここまで宮川の提案した目的構文の分析では、再構造化が働くかどうかで単文構造と複文構造の両方を持つことを述べてきた。しかしながら、目的構文になぜ再構造化が適用される場合と適用されない場合があるのかについては、十分な説明がなされていない。また宮川の判断には一般的な判断と大きく異なる場合もあるため、その点も検証しながら目的構文について新しい分析を提案したい。

臺灣大學學術期刊資料庫

２．１ 「Ｎに行く」と「V(N)に行く」

まず主動文「N に行く」と目的構文「V(N)に行く」を比較してみよう。一つの共通点は(21)に示したように着点名詞句と目的動詞句が共に「に」格で表されること、もう一つは主動詞文「N に行く」も目的構文「V(N)に行く」も着点格が必須項であることである。

(21)a 太郎が新宿に映画を見に行く。

b 太郎が新宿に行く。

また、主動詞(21)では「新宿」に着点格「に」か、あるいは方向を表す「へ」がつく。一方、目的構文(23)では目的動詞句につく助詞は「に」に限られる。

(22)a 新宿に行く。

b 新宿へ行く。

(23)a 映画を見に行く。

b*映画を見へいく。

(22)と(23)の相違点は着点を表す名詞句と目的を表す動詞句にある。主動詞では、(22）に示したように着点が場所名詞であり、助詞「に」も「へ」もとることが可能である。一方、目的動詞句では動詞句のほかに漢語の動作名詞も生じうる。漢語の動作名詞は動詞形態素「する」に編入し動詞「V(N)する」になるのもあれば、動詞「する」と結合し「V(N)をする」の動詞句になるものもある。また動詞句の位置に名詞句と見なされるものもある。

まず、(24)の漢語の動詞句と(25)の動作名詞句の例を見よう。

(24)a フライブルク大学へ哲学を勉強しに行った。

bフライブルク大学へ哲学の勉強をしに行った。

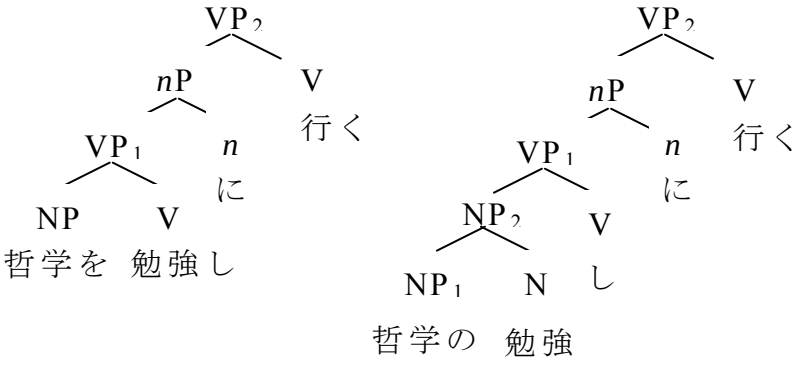
(25)a フライブルク大学へ哲学を勉強に[3]行く。

b フライブルク大学へ哲学の勉強に行く。

[3] 漢語の動作名詞は格付与することができ、(24a)「哲学を勉強しに行く」と(25a)「哲学を勉強に行く」前者は顕在的動詞形態素「する」があり、後者は潜在的動詞形態素「φ」がある。動作名詞は動詞形態素の有無につき、本論では詳しく論じない。

臺灣大學學術期刊資料庫

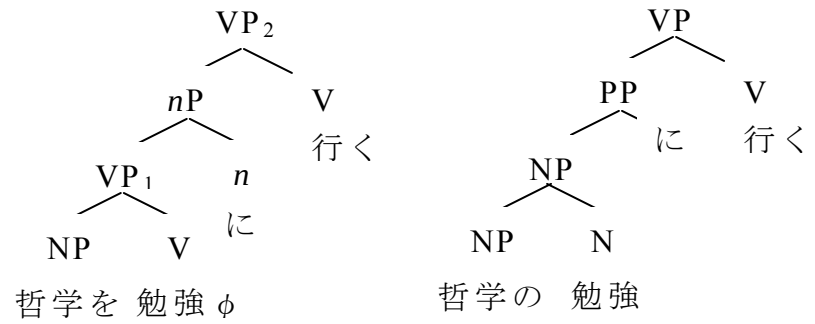
(26)a 哲学を勉強しに行く　b 哲学の勉強をしに行く。



(24a)、(26a)ではVP_1における動詞「勉強する」は「哲学を」に［Theme］を付与し、軽名詞*n*「に」の補部として選択され、その*n*Pはさらに主動詞「行く」に選択される。

(24b)、(26b)ではNP_2における動作名詞「勉強」は「哲学」に［Theme］を付与し、「する」に編入する[4]同時に「を」格が認可され、そしてVP_1は軽名詞*n*「に」の補部として選択され、*n*Pはさらに主動詞「行く」に選択される。

(27)a　哲学を勉強に行く　　b 哲学の勉強に行く。



(25a)、(27a)ではVP_1において「勉強」は「哲学」に［Theme］を付与し、空の動詞形態素φによって「を」格を付与する。そして軽名詞*n*に補部として選択され、*n*Pはさらに主動詞「行く」に選択される。

(25b)、(27b)では名詞句内で「哲学」が「勉強」によってθ-roleが付与され、そしてNPが主動詞「行く」に選択される。

[4] θ-roleはLFでの編入によって付与される。軽動詞編入について詳しくはSaito&Hoshi(2000)を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

次に、和語動詞句と名詞句の例を見よう。

(28) 和語

a 少年 { に / *(と)の } 会いに行った。

b 食堂にご飯 { を / *の } 食べに行った。

c ポストに新聞 { を / *の } 取りに行く。

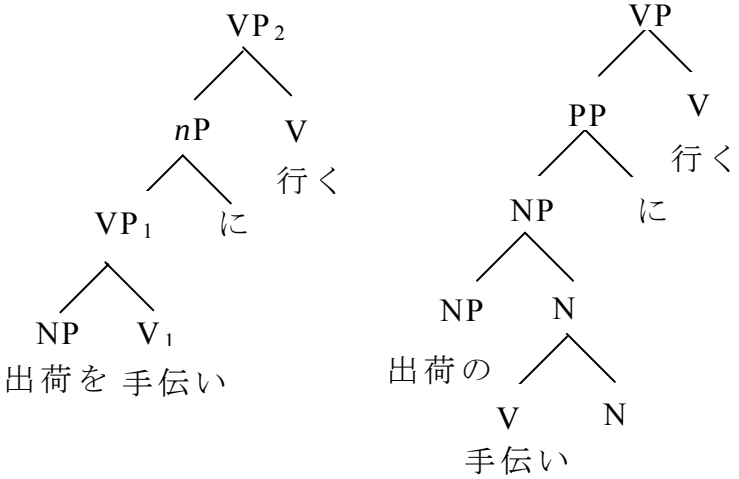
d 映画 { を / *の } 見に行った。

(29)a 新婚旅行へ行く友人 { を / の } 見送りに出かけた。

b 農家に野菜の出荷 { を / の } 手伝いに行く。

(28)の動詞句は名詞句に書き換えられない[5]が、(29)では動詞句も名詞句も目的構文においての可能な表現である。

(30)a 出荷を手伝いに行く　　b 出荷の手伝いに行く



(30)では和語の動詞と名詞は同一形態で示されている。その同一形態は、語彙挿入の前に品詞が動詞でもなく、名詞でもない中立的な形態である。中立的形態には選択素性と厳密的下位範疇があるが、

[5] 名詞形がない「会う」、「食べる」、「とる」、「見る」などは(30a)の構造しかない。

臺灣大學學術期刊資料庫

その品詞は後に素性によって決まる[6]。(30a)では「手伝い」は動詞素性［+*v*］によりVP$_1$内で「出荷」に「を」格を与え、上に投射したVPが軽名詞*n*に補部として選択される。(30b)では「手伝い」は名詞素性［＋*n*］によってNPに投射しNP内で「出荷」にθ-roleを付与し、後置詞「に」に格が付与される。

２．２　目的動詞句の主要部と軽名詞 *n*

これまで見てきた例によれば、軽名詞 *n* に補部として選択されるのは VP であるというのはまだ不十分であり、語彙範疇よりほかに意味上選択も必要である。次の例を見よう。

(31)a *僕が教会へキリスト教を信じに行く。

b *富士山が見えにいく。

c *自分が成長に行く。

d *バーへ酒を飲めにいく。

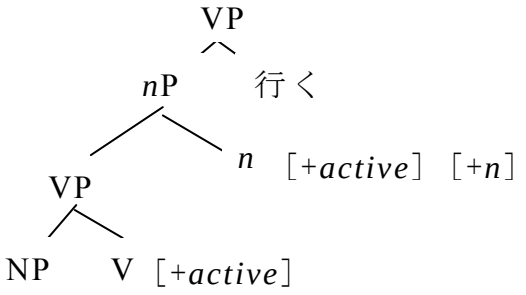
e *New Orleansへジャズを好きに行く。

(31)では目的構文の目的句が VP であっても非文となる。「信じる」、「見える」、「成長（する）」、「飲める」、「好く」はいずれも状態動詞［*-active*］である。この事実を説明するため軽名詞 *n* に選択される目的句は[+*active*]でなければならないという条件が必要である。つまり軽名詞 *n*[+*v*]素性は[+*active*]であると仮定しよう。この仮定に従うと、目的構文の動作名詞 V(N)P は、主動詞「行く」と目的構文を作る時、名詞素性[+*n*]も動詞素性[+*active*]も持っていることになる。そこで[+*active*]を持つ V(N)P はその動作名詞句内で項に θ-role を与える同時に、軽名詞 *n*「に」に編入する。*n* は V(N)P を補部にとり *n*P に投射し、「行く」の補部となる。

[6] Chomsky(1970)によると語彙部門において項の選択または厳密的下位範疇の素性が決まっている一方、品詞に関する素性は選択上の問題であるとした。

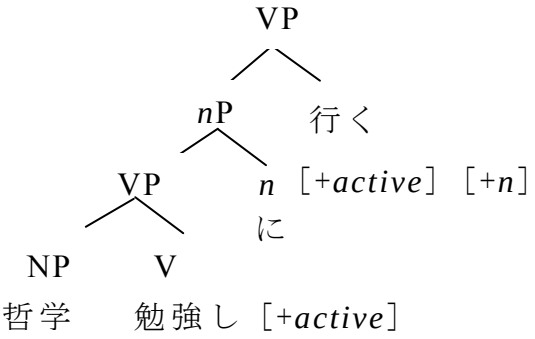
臺灣大學學術期刊資料庫

(32)

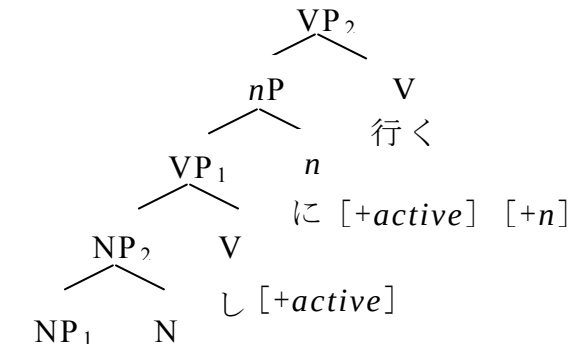


(32)の構造に基づき(26a,b)、(27a)、(30a)の図示は次のようになる。

(33)a 哲学を勉強しに行く

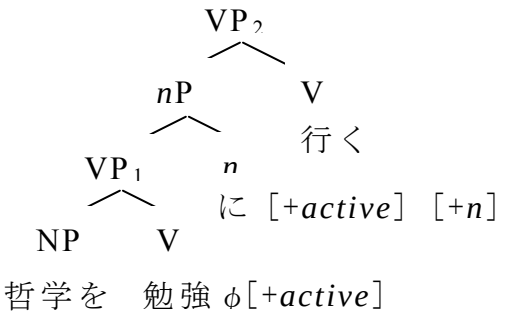


b 哲学の勉強をしに行く

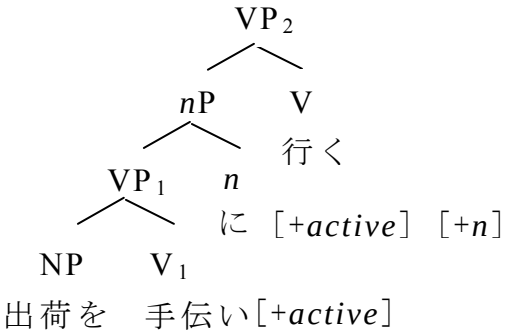


臺灣大學學術期刊資料庫

(34)　哲学を勉強に行く



(35)　出荷を手伝いに行く



２．３　付加詞と補部の違い

目的構文について、宮川は目的動詞句が主動詞との間に隣接関係が成立する場合再構造化の適用が可能であると述べている。そしてその再構造化は随意的であり、それは適用されると目的構文は単文構造となり、適用されなければ複文構造のままであるとしている。また宮川の文法性の判断には疑わしい点が多々ある。本節ではこのような点を念頭に置いて、目的構文のいくかの特徴について異なる説明を試みる。

まず、目的構文のかき混ぜ操作の可否と現象から再検討するとしよう。宮川の論議は次のようなものであった。

(36)a 太郎が[PRO 本を買いに]行った]。

b 太郎が神田に（／へ）本を買いに行った。

c 太郎が本を買いに神田に(／へ)行った。

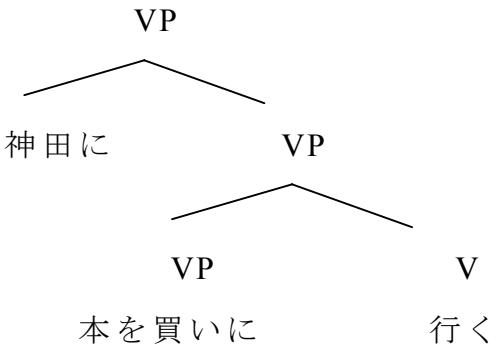
臺灣大學學術期刊資料庫

d 太郎が神田に本を自転車で買いに行った。

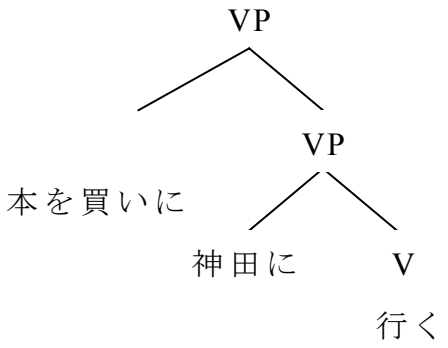
e*太郎が本を自転車で買いに神田に行った。

宮川は動詞の隣接関係で再構造化が適用されるとしている論点[7]に対し本論では目的動詞句の位置には「行く」の補部の場合と付加詞の場合があると仮定する。この仮定によると、付加詞と補部の非対称性により、付加詞条件(Adjunct Condition)[8]によって、付加詞からの要素を取り出す場合は非文となり、補部からの要素を取り出すのは文法的であると予測される。

(37)a 補語の位置にある VP



b.付加詞の位置にある VP



(37a)では「行く」が「～に」を補部として選択すると考える。これに対して(37b)では「本を買いに」は「本を買うために」[9]のように

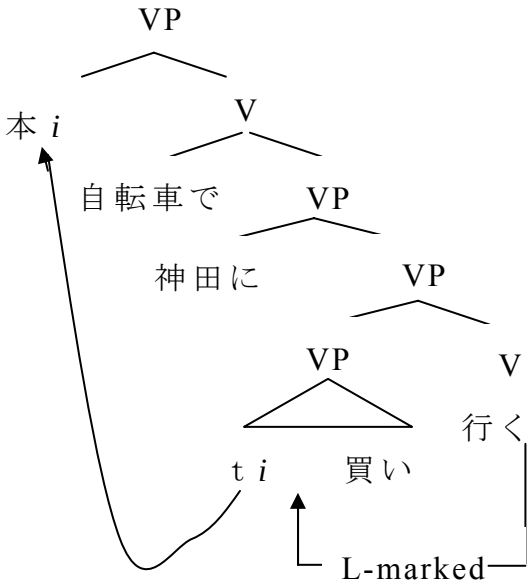
[7] 本文 1.1 を参照。
[8] 付加詞からの要素の取り出しを禁ずる条件。
[9] 「市場へ新鮮な魚を求めに、買いに行った」のように付加詞として考えられる。

臺灣大學學術期刊資料庫

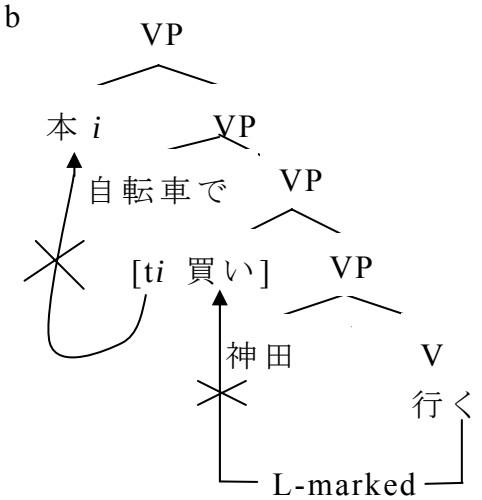
付加詞の目的節に書き換えることが可能である。(37b)の「行く」は「神田に」であり、これは通例の用法である。

このことを前提としてかき混ぜの事実を見よう。

(38)a



b



(38a)では「本を買いに行く」が「補部＋V」となっておりそれ全体が着点の「神田に」と道具格の「自転車で」が付加されている。そして補部の目的動詞句 VP は主動詞「行く」により L-marked されているので、阻止範疇にならず、VP 内の目的語を外に移出するのが許さ

臺灣大學學術期刊資料庫

れる。一方(38b)では「行く」と着点の「神田に」が結合し「補部＋V」となっておりそれに「本を買いに」と「自転車で」が付加されている。「本を買いに」は付加詞であるので、主動詞「行く」により L-標示されず阻止範疇となり、その中から目的語を移動することはできない。このように宮川の例(1)の文法性の相違は再構造化によるのではなく、付加詞条件によって説明される。

次に下の例を見よう。

(39)*太郎が[$_{\alpha}$本を自転車で買いに]神田に行った。

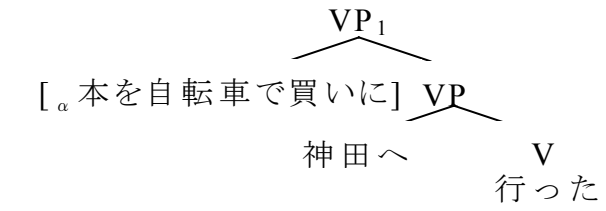
(40)*太郎が先生に自転車で相談に昨日来た。

(41)*数学を船で勉強にアメリカに行った。

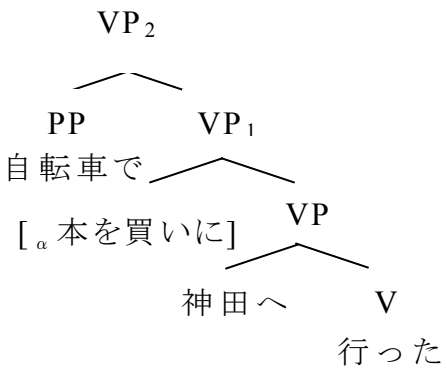
(42)*花子が英語を飛行機で習いに渡米した。

(39)～(42)「～に」が補部となっていない。(42)「渡米する」は「～に」を補部としない。このことから、(39)α＝付加詞、その中に「行く」を修飾すべき「自転車で」があるので修飾語と V は同一 VP 内にあるのが原則である。

(43)



(44)



臺灣大學學術期刊資料庫

(43)では「自転車で」は「行く」を修飾するためにVP$_1$内の直接要素でないといけないことに対し、「自転車で」はαに含まれ「行く」を修飾することができなくなり、非文となる。これに対して、(44)では「自転車で」はVP$_2$内の直接要素であり、「行く」を修飾することができる。

一方、目的構文の主動詞は「行く／来る」の他に「出かける／渡米する／帰る」もあり、宮川の判断によると次の(45)~(47)は再構造化が適用されないため非文とされている。

(45) (*)[10] 太郎が本をタクシーで買いに出かけた。

(46) *花子が英語を飛行機で習いに渡米した。

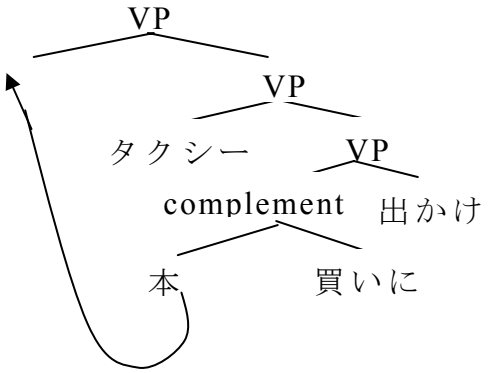
(47) (*)良子が本を車で取りに帰った。

(45)~(47)の中で(46)は全く容認不可能であるのに対して、(45)と(47)はそれほど容認可能性が低いのではない。このことから「出かける」、「帰る」は「行く」などと同様に目的動詞句を補部にとると考えられる。即ち、意味的に着点を主動詞に編入しない「行く／来る」は着点や方向を補部に取ることができるのに対して、「帰る」と「出かける」は意味上で任意的に着点を編入し、目的語は補部に取ることが可能であるが、「渡米する」は複合語で着点を義務的に編入しているため、統語上では目的動詞句は補部に取らないと考えられる。このことが正しいとすると、(46)の目的節は付加詞であり、その中「渡米する」の修飾語「飛行機で」があるので非文であるのに対して、(45)、(47)では目的動詞句は補部であるので、「タクシーで」、「車で」が「出かける」、「帰る」を修飾できる。図構造で示すと(45)は(48 a)に、(46)は(48b)のようになる。

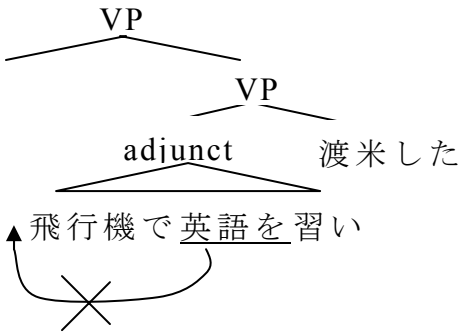
[10] Informantsに判断してもらった。

臺灣大學學術期刊資料庫

(48)a



b



次に、「しか~ない」の作用域について見よう。

(49)a 花子が図書館に雑誌しか借りに行かない。

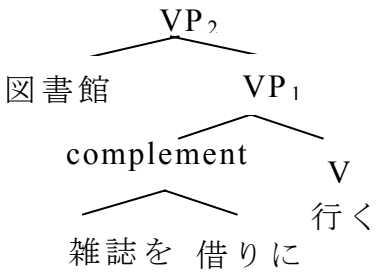
b*花子が雑誌しか借りに図書館に行かない。

c [$_S$花子が図書館に[$_{VP}$雑誌しか[$_V$借りに行か]ない]]。

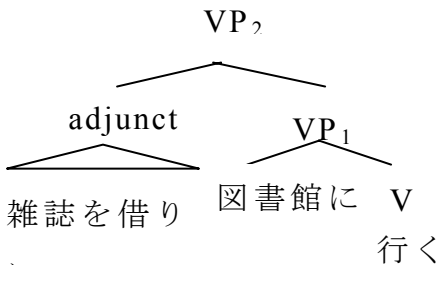
d*[$_S$花子が[$_S$PRO[$_{VP}$雑誌しか借りに]]図書館に行かない]。

宮川は「しか～ない」の作用域が(49a)では「借りに行く」に再構造化が適用された単文構造であり、(49b)では「借りに」と「行く」の間に「図書館に」が介在して隣接関係ができないので再構造化が適用されなく複文構造となっていることが説明されると主張されている。これに対して、目的動詞句の位置には「行く」の補部の場合と付加詞の場合があるとすると、その構造は次のようになる。

(50)a



b



(50a)の例をみると、「雑誌を借りに」は「行く」の補部にある場合VP_1

臺灣大學學術期刊資料庫

の下で補部にある「雑誌を借りに」と「行く」はその直接要素であり、「しか～ない」の作用域はVP_1に該当すること。一方、「雑誌を借りに」は付加詞にある場合VP_1の直接要素でなくなり、「しか～ない」の作用域に入らない。

続いて動詞の可能形-(rar)e-について見よう。日本語の状態動詞は目的語に「が」格をとることから、動詞の可能形「V-(rar)」が一つの状態動詞と見られる。また述語が動詞の可能形の場合、同一文中にある目的語が「が」格をとるのが可能となり、「を／が」交替ができる（(5)は下記の(51)に再現する）。

(51)a John が英語を話す。

b John が英語｛を／が｝話せる。

しかし、(52b)、(53b)に埋め込み文の目的語は動詞の可能形とは違う節にあるため、「が」格が付与されなく「を／が」交替の現象が見られない。

(52)a ぼくが太郎にテレビを見るか聞ける。

b*ぼくが太郎にテレビが見るか聞ける。

(53)aぼくが太郎に［$_S$PROテレビを見るか］聞ける。

b*ぼくが太郎に［$_S$PROテレビが見るか］聞ける。

(52)は(53a)に示したような複文構造だから、「テレビを」は「テレビが」に交替できない。一方、目的構文の可能形は VP 内の目的語の「を／が」交替の現象も見られる。

(54) a 太郎が新宿に映画を／が見に行ける。

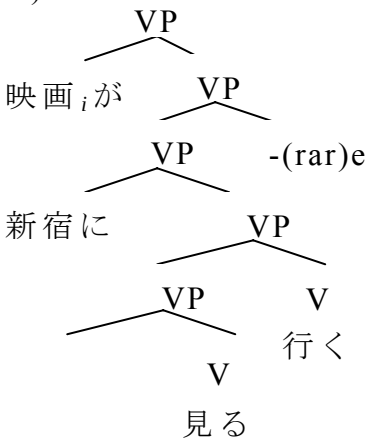
b 太郎が映画を／*が見に新宿に行ける。

(55)a ぼくが図書館に本を／が返しに行ける。

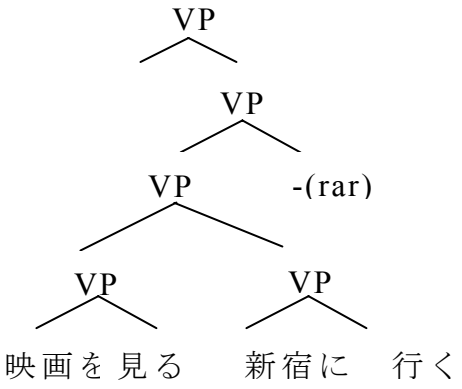
b ぼくが本を／*が返しに図書館に行ける。

臺灣大學學術期刊資料庫

(56) a



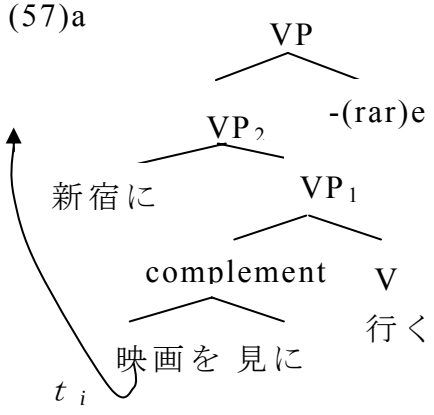
b



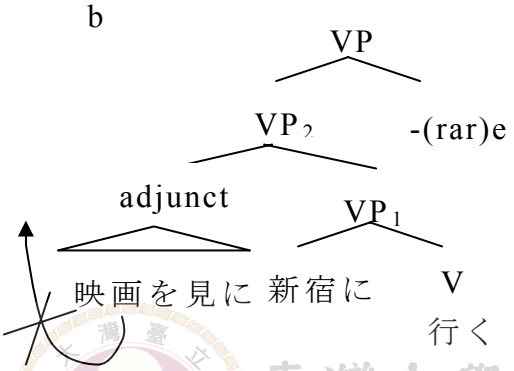
「V-(rar)」と「NP を／が」が同一の VP 内にある場合「を／が」交替が可能である。(56a)では「映画を／が見に」と「行ける」が再構造化によって単文構造となっていると仮定すると、目的動詞句 VP の目的語が「を」格を取ることが説明できるが、一方「が」格については単文構造であるために(56a)のように「を」格から「が」格の位置への移動が可能である。このようにして、単文である(54a)と(56)では「を」格又は「が」格は両方とも許される。これに対して、(54b)と(55b)のように目的動詞句の V が「行く」と隣接しない場合には再構造化ができず、目的語は(55b)のようにもとの位置に留まり、「が」格が許されないというのは宮川の論点である。

これに対して付加詞条件によって説明できる。(54a)、(55a)は(57a)の構造を持ち、(54b)、(55b)は(57b)の構造を持つ。

(57)a



b



(57a)では、補部の動詞句にある「映画」を移動して可能形の目的

臺灣大學學術期刊資料庫

語になれるが、(57b)では付加詞条件によって移動は許されない。

３．結び

目的構文において目的動詞句は自らの項構造を有し、それに「行く」と結合し「V(N)Pに行く」の構造を持っている。その内部構造を見ると、目的構文の目的動詞句には項構造をもつ動詞あるいは名詞が含まれる。そこで機能範疇*n*を設け、その*n*に素性[+*n*],[+*active*]があると仮定し、VPは*n*により選択される。目的句[11]は主要部が動詞の場合、動詞句内でVが内項にθ-roleを付与し、その他の項にθ-roleを付与するため、主要部移動が行い、その上の項にθ-role を付与するため*n*Pを選択する「行く」に移動する。名詞の場合では後置詞「に」によって格が付与され、さらに「行く」に選択される[12]。

また、目的句の統語分布を見れば、宮川は目的動詞句の動詞と主動詞「行く」の間に隣接関係を成し再構造化が起こることにつき、道具格の付加、単文構造を作用域とした「しか~ない」と可能形で説明をしたが、しかし目的構文は時には単文構造であり、時には複文構造であることに関して、説明が尽くせなかった。それは目的句が補部にあるか、付加詞にあるかによって、すなわち付加詞条件によって説明ができる。そして目的構文の主動詞は「行く／来る」の他に「出かける」、「帰る」、「渡米する」などあるが着点を編入しない「行く」と随意的に編入する「出かける」、「帰る」は目的句は補部にも付加詞にも取るのが可能なことに対し、目的句は着点を義務的に編入する「渡米する」はその付加詞となる。

本論は目的構文について進めたが、「行く」に選択される目的句の事象構造に変化が起きるため、*n* に[+active]素性を持つと仮定すること、また主文の意味は目的句の意味を受け継ぐことから、「行く」は事象構造を変える軽動詞の役割が大きいという点につき、次の課題として論じていきたい。

---

[11] 目的構文に内包される句構造は、主要部は形態上で動詞である場合、目的動詞句といい、動詞以外の場合と目的句で一括する。

[12] 「選択」は狭義的に項の選択を指すが、ここで敢えて修飾関係を広義的な選択関係とする。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

Chomsky, N., 1970 “Remarks on Nominalization. ”Reprinted in *Syntactic Argumentation*, edited by Donna Jo Napoli and E.N. Rando,. Washington: Georgetown University Press. 138-83

Hale, K., and J. Keyser. 1993 “On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations.” In *The View from Building 20: Essays in Linguistics In Honor of Sylvain Bromberger.* MIT Press..53-109.

Miyagawa, S.,1987 “Restructuring in Japanese” In *Issues in Japanese Linguistcs* edited by Takashi Imai and Mamoru Saito, Foris Publications, Netherland. 273-300

Saito, M., Hoshi, H., 2000. “The Japanese Light Verb Construction and the Minimalist Program.” In *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. MIT Press, Martin, R., Michaels, D., Uriagereka, J. (Eds.), Cambridge, MA.261-295

臺灣大學學術期刊資料庫

臺灣大學學術期刊資料庫